1章　日本の伝統文様

植物・冬

棗（なつめ）の椿
CD 1_049
本物は蒔絵ですが、彩色したくなるほど完璧に造形化された単位文です。

蒔絵硯箱（まきえすずりばこ）の椿
CD 1_050
可憐な椿の花ですが、樹枝や葉全体でまぎれもない椿の生命力を表現しています。

蒔絵重箱の椿
CD 1_051
花籠（はなかご）に入った花束のなかの椿のデフォルメに、主役としての存在感が感じられます。

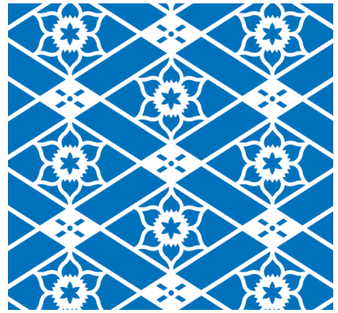
女官衣装の椿
CD 1_052
実物は、筆に勢いがあり見事な描写力です。椿の生命力を感じる手法が秀逸です。

古人の忌避感をあまり感じさせない椿文様の美

春を待ちこがれる人の心情をそのまま文字に表しているように、春に先駆けて咲く真紅の椿花を見ると、この花のもつ宿命的な禁忌伝承を吹き飛ばす美しさに魅了されます。もっとも、妖しい美しさをもっているところに、反作用を呼び起こす原因があるのかも知れません。

蒔絵盆の水仙
CD 1_053
長く伸びやかな葉の、流れるような曲線の描き方とそのバランスのよさに注目しましょう。

友禅小袖の水仙
CD 1_054
水仙の可憐さが、どちらかといえば<無垢>に振られたやや平凡な表現です。



小紋<水仙入菱格子>
CD 1_055
水仙がもつけがれのない美しさを失わず、上品に小紋化されています。

鍋島色絵皿の水仙
CD 1_056
花の清純素朴な表現と、皿の曲率に合わせた葉の見事な意匠化に学びましょう。

意匠として発展させる難しさをもつ花

純白の花弁にふっくらとした黄色いシベ、そして伸びやかな深緑の葉、これだけでも美しい意匠は完成されたも同然です。しかし、それだけに大事なポイントの表現をそこなうと水仙に見えなくなる、というところに、この花を意匠として発展させるときの難しさがあります。伝統文様でも、それぞれが佳品でありながら、造形において似かよったものが多く見られます。